

## 智慧のみ光

一。底のないものということとは、形のないものということである。形が形だけであるならば、その形には命がない。

形のないものが永遠に形のないものであるならば、形のないことすら知れようはないし、形のないことが底のない深さだということも知れようのないことである。

仏教では、形のないことを真空といい、形のあることを妙有という。形は形のないものからの顕れである。形のないものは限りなく形となつて顕れてくる。であるから、真空のままが妙有であり、妙有のままが真空である。

紙の上に描かれた墨絵の山水に、人は時に幾百千金を投ずる。何故に大家の下した簡略な山水に価があるのであろう。それは描かれた絵にあるのではあつても、ほんとうは、絵の奥にある形のないもの、形を超えたる無形の絵に価をみているのである。したがつて偽筆はいかに形は本物以上に出来ていても、この形の奥の無形の絵はどうすることも出来ないし、その尊きものの代わりに功利的な心から出た虚偽がその絵の上にあるが故に、偽筆に価を持たぬのである。絵の奥の絵、無形の絵は書くことによつて無くなるものではなくて、十出せば百、百出せば千、いよいよ深くなるものである。文字にしてもその通りである。この無形無色の絵こそ、人格そのものである。

「一には法性法身と申す、二には方便法身と申す。法性法身と申すは色もなし形も一ましまさず、しかれば心もおよぼさず、語もたえたり。この一如より形をあらわして方便法身と申す。その御相に法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたもうなり。この誓願のなかに光明無量の本願・寿命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御形を、世親菩薩は尽十方無碍光如来と名けたてまつりたまへり。」

この『唯信抄文意』の御言は、いく度頂いても尽きせぬ尊いありがたいものを感じることである。私の話の中で一番たびたび引用せられるものの一つであろう。

「色もなし形もましまさず、しかれば心もおよぼさず、語もたへたり。」形色を超え、言説を超えたる法性法身、それがそのまま一切衆生の業苦によつて大悲本願の躍動、法性生起して願心莊嚴の報土となり、光寿二無量の形を大悲の本として名号を成就し、十七願、諸仏称名の願において名告り、十八願、至心信樂の世界において衆生の機の上に受領せしめ、第十一願、必至滅度の願の大利益を得しめて、現実に正定聚不退、等正覺の位にあらしめたもうこと、これまつたく、「一如より形をあらわして」本願眞実の救いを成就したもうのである。

しかし如何に形を示し、名と現われたもうても、その形は固定化された形ではない。あくまで、無形無色のまま、そのままの形色である。いよいよ形色と現われれば現われるほど、その形色を通して一如の寂滅相、涅槃の無相を現わしたもうのである。『論の註』に、

「由法性法身生方便法身 由方便法身出法性法身 此二法身異而不可分一而不可同。」

とお説きなざるのも、この意である。無色無形の法性法身なくして、願行成就の方便法身は生じない。法性法身によつて生じたる方便法身は、それによつて法性法身を出すのである。法性法身、久遠の法身の底なき尊さは、そのまま方便法身の上に出てくるのである。

一切衆生界は、衆生多少不思議とて、永遠に尽きる日はあり得ない。衆生界の尽きぬ限り、久遠実成の法身が、十劫正覚の願行をおさめて、滅度したもうの日はあり得ない。であるが故に、具体的にましますものは方便法身そのものである。

我らはともすれば苦惱なき日を求め、苦惱の尽きた日のあるがごときことを空想する。あいすまぬ愚痴の一相である。衆生界は尽きぬ、大悲も尽きない。衆生界の尽きぬことを思い、永遠に滅度したまわぬ大悲を憶念し、五劫思惟の御意みこころに入る時、永遠の悲しみと永遠の喜びを知るであろう。

久遠の涅槃城より従果向因して、生死界に永久に大悲の願行を廻向したもうことは、今、我らが念仏の事実となりたもうてある。私の生くべき道は一あつて二なきことを謝せずにはいられない。

「この報身より應化等の無量無数の身をあらはして微塵世界に無碍の智慧光を放たしめたもうが故に尽十方無碍光仏と申す。光の御形にて色もましまさず形もましまさず、即ち法性法身に同じくして、無明の闇をはらひ、悪業にさえられず、この2故に無碍光と申すなり。無碍は有情の悪業煩惱にさえられずとなり。然れば阿弥陀仏は光明なり。光明は智慧の形なりと知るべし。」

形をあらわして不可思議の四十八願をおこしあらわしたもうとも、そのまま「光のおん形にて、色もましまさず、形もましまさず、即ち法性法身に同じくして」阿弥陀如来は光明である。法界を照したもう光明である。しかし光明とは「光明は智慧の形なり。』論』には光明智相と示される。願々ことごとく智慧光である。言々ことごとく智慧光である。名号とは智慧である。したがつて信心とは智慧である。証とは智慧である。この智慧光、微塵世界に輝きたもうのである。

この智慧光そのまま、それに何ものをも加えない、一微塵を添えない、光そのまま、そのまま回向顕現して、衆生の信心の智慧となりたもうのである。日月の光は外を照す。智慧光は魂の内を照す。照して闇を破り、志願を満したもう。その破闇満願がそのまま仏の智慧光、それを「無明の闇をはらい、悪業にさえられず、この故に無碍光と申すなり。」とお示しになるのである。破闇満願することが、そのまま無碍の智慧光、尽十方無碍光である。

南無帰命とは、この光、衆生の大主観となりたもうこと、即ち、衆生における開かれたる眼、『観経』のいわゆる心眼である。眼はこれによつてものを見るべく、その眼を見ることは出来ない。故に得たりと眼をつかむものは、得たのではなくして、煩惱の偽装にしてやられているのである。もちろん、疑心あるものは、この無碍光さながらの光に遇わぬものである。かくの如き光明智相の如く生きるもの、即ち破闇満願し

て念仏する全一の境を撰取不捨と言われるのである。撰取不捨の境こそ、久遠の法身さながらの智慧光の衆生におけるすべてである。久遠の大悲は、今、衆生界をその智慧の光懐に撰取して、真如一実の功德大宝海を、行者の上にあらしめたもうのである。

有漏の業風に凍つて六道の水となり、我によつて一切を固定化せんとする衆生、水によつて肉を切るものではなく、堅き氷によつて全身傷だらけの衆生、その氷は今、触光柔軟と、大悲の光懐にとけそめて、無相の光輪を五蘊仮和合の肉身の背景にあらせたもう。形は円融の太用によつて無限にこれを空じたもう。黒業成就のあるがままの墨絵に、光の御形にて色もましまさぬ智慧の形をあらせたもう。

蓮師言く

「信心治定の人は誰によらず、まず見ればすなはちたふとくなり候。是れその人のたふときに非ず、仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有り難き程を存すべき事なりと云々」と。

動く一幅の墨絵、尊き哉、生ける至高の芸術、念仏の行者。

「釈迦弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる

信心の智慧に入りてこそ 仏恩報ずる身とはなれ」(『正像末和讃』)

この御和讃によれば、願作仏心ということと、信心の智慧ということとは、同一のものとしてされている。

願作仏心を獲るとは、正しい永遠を貫く願を獲しめて下さることである。この正しい願は信心の智慧の具体的な相である。正しい願、この願は如来の真実教によつて開発したもうものである。真実教、唯一の真実教、その真実教が耳から心の底に徹倒して開発したもうものが、願作仏心である。真実の教えに遇うたこと、これほどうれしくも有難いことがあるであろうか。

人は多く、真実の生活を成就するとは心の持ち方を変えることだと思つたり、一時的な興奮をそれとまちがえたり、すつたり、もんだり、磨いたり、心得こころえをかえたりすることだと思つている。しかし、それはついに徒勞である。

真実の教えを聞くこと、真実の教えを聞かせること。それをぬきにして、瞋恚の拳こぶしをふり上げて、いくたび叱つても、責めても、興奮させても、それではどうにもなるのではない。真実の教えを聞くこと、それが正しい智慧を得る唯一の道である。正しい信心の智慧があるとところにのみ、真実の願作仏心がある。教えを聞かないものは、人に教えを聞かせないで己が我慢で人を自分の型に入れようとする。呪われた教えなき世界よ。

真実の教えは、一時は迷妄の雲の中に葬られるようでも、決して亡んでしまうものではない。真実の教えの中には、「名声超十方」と誓いたまえる弥陀の御意みこころが入っている。弥陀の名声こそは釈迦教の基本である。三世を超え十方を超えたる普遍の太行たる名号、正宗の中味が入っている。だから真実の教えなのである。であるからこ

そ、真実の教えが、これを聞く人の迷いを寸断して智慧を成ずるのである。真実教による智慧がものを言わねば、必ず三毒がものを言う。

信心の智慧こそは一切の価値の認識原理である。我の強い人、人間としての才学ある人は、如何にもものがよくわかったようである。しかし、我<sup>が</sup>の見た人生は狂っている。我<sup>が</sup>が尺度で計ったことは間違っている。そこには必ず「無理」がある。決して人の心を真に動かすものではない。それは顛倒虚偽であって正しい法則でないからである。

法則ということについて、『一念多念証文』には「則是具足無上功德」という大経の文を解釈するにあたって、次のように言っている。

「為得大利といふは無上涅槃をさとする故に、則是具足無上功德ともたまへるなり。則といふはすなはちといふ。のりと申すことばなり。如来の本願を信じて一念するに、必ず求めざるに無上の功德を得しめ、知らざるに広大の利益を得るなり。自然にさまさまのさとりをすなはちひろく法則なり。法則といふは始めて行者のはからひに非ず、もとより不可思議の利益にあづかること自然のありさまと申すことを知らしむるを法則とはいふなり。一念信心をうる人のありさまの自然なることをあらはすを法則とは申すなり。」

信心の自然なることを法則と言われる。正しい法則である。「法則といふは始めて行者のはからひに非ず。」大法を信ずるものは知らざるに広大の利益を得る、そのこととの自然なるを法則と言われる。人間の我<sup>が</sup>の計<sup>は</sup>は自然の法則にかなわぬ。故に広大不可思議の利益にあづかることが出来ない。無理だからである。無理ではいけない、自然の法則でなければいけない。

この自然の法則が一切の尺度になって、自然に様々のことがわかつて来るのである。『大経』に明信仏智の世界において為得大利といい、不了仏智の世界において為失大利と仰せられることも背<sup>う</sup>かれることである。零か満点かの問題である。はからわなくても、真実の教えを聞く者は、自然の法則にかのうて、無上の功德を具足するのである。智慧とは大法に随順する心である。これやがて一切を正しく見る眼である。

真実の教えは、信心の智慧を成就して下さる。智慧の成就するところにのみ、真の道の華が咲く。人間のはからいではわからない奇蹟は、たゞこの信心の智慧からのみ生れる。奇蹟とは、決して、石から水が出たり、首を切られた人が生きていたりするような、芸人の奇術のようなことをいうのではない。真の奇蹟とは、徳の世界、道義の世界においてのことである。今日まで人を苦しめ泣かした存在が、大法の前にぬかづいた一念に、世の中を照す光の中心となることである。智慧はそのまま微塵世界に光あらしめたもう尽十方無碍光如来の無碍の仏智なのである。仏智が人間の上に光つて下さるのである。これに増した奇蹟がまたとあるであろうか。私は、今日も毎日この奇蹟の前に合掌している。このために、心の底に涙の泉の湧き出でぬ日が近う到来に一日でもあつたであろうか。私はどうすればいいのだ。「御恩だ、御恩だ」と言ってみても足りない。どうしようもないこの心。

「釈迦弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる

信心の智慧にいらりてこそ 仏恩報ずる身とはなれ。」

信心の智慧に入りてこそ仏恩報ずる身とはなれ。頂けます。頂けます。智慧が私にあるとは思えない。本仏の大慈悲が身にしみ、大法の言々句々が骨髓にしみ、多くの同胞にとりまかれたるこの愚悪の我、何とも申しわけのない我が姿のみ見えることではあるが、御恩徳のみ、天にも地にもあまることである。ああ真実の教えよ。一糸乱れぬ不滅の法則よ。我は智慧のみ光に照されているよ。

貪欲のみのものを言う世界は暗い。三毒煩惱の暗い闇路にあつて、しかもそれが暗いとも思わず、ただ眼前の苦楽に追われ囚われて、無意味と不満足とにやせ細つて、消えてゆく幻を追う。その中に聞ゆる群賊悪獣の声、厭離すべき悪知識を厭離せず、親近すべき善知識に親近せず、その中に聞ゆる悲痛なる愚痴、怒罵、嫉妬、反逆、諂偽、呪阻、等のごめき、智慧の光なき悲しき世界が我らの前に展開する。悲しくなる、痛ましくなる。こうして衆生は大悲のみ胸を焼くのである。み光の前にそれがわかる。

一。み親の上にあつては尽十方無碍のみ光も、私の内にあつては仄かなる光である。善導が「闇さ四五寸ばかりなるべし」と仰せられたことも、さこそ、と肯かれることである。三毒の心は広い。暗い心の奥をほのかに照したもう光。日月がただ孔穴の闇を照し破ると違つて、心の奥の闇を照破したもう光である。しかし、このみ光に遇うまでは心の闇さえなかつた。み光によつて照し出された無明の姿である。光によつて闇を知るといえば矛盾のようだが、これが心霊の事実である。み光によつて心の闇の深さがわかる。ここに念仏行者の、内に湛えられた悲しみがある。喜びが深ければ深いだけ。

一。本願がものを言つて下さる信の世界では、善と思つたものまでが有漏三毒の变形である。腹が立つた時ほど人は善人になつている時はない。三毒の大蛇がまたしても善人意識の鎌首をもたげる。それがやがて仏法を聞いて、それを口にくわえて振りまわす。それが自力の信である。自力の信には「得たと思う」心があつて、心の闇はあり得ない。

そうした八万四千の定散自力の心が、み光の前に廃捨されて、三毒自身のありのままの相を、そのままに静かに照し出されて、それを静かに照し出したもうみ光のままに安住する十八願の信の世界、極難信と言われるゆえんである。三毒がそのままの正体をあらわす時は、み光のみ静かに流れたもう時、無我に大法に随順した時である。

日光が照すのは物理的な法則によつてであるが、仏日が照したもうのは心霊の事実であつて、物理的な、機械的な相でない。教えによる自覚内観の成ずるまま、その自覚内観の線に添うてであるが故に、一律にということが出来ない。そこに宿善開発の問題が横たわる。教えは外より心耳に入り、宿善は心霊の内奥より開発する。であるから、一度、教えを拒むもの、内観を拒むものがあるという時、如何とも出来なくなつて、千万年でもそこにとどまつてしまふ。

一。内観の一道、彼岸に通じ、教えによつて心のトンネルが開通されたものは、心の奥が浄土の光に照される。浄土よりこの心の上に念々に満されるものが内より外に念仏となつて顕われる。

念仏が先に行つて、自分が後から追いつこうとするもの。

念仏が後になつて、自分が先に行くもの。

念仏と我とが一体になつて歩む人。

いわゆるお同行は、報謝の称名だとして念仏はさかんに申しつつ、問題は解決されることなく後に残つてゐる。何時もお礼の念仏に追いつこうとしてゐる。

お寺さんは、多くの方がお念仏よりも先に行く。わかつたつもり、得たつもりで、高くとまりつつ、実際の口や手足の動きを見ると、ぎこちない名利貪欲のみが先に行つてゐる。だから何人集つても天狗ばかりで、ご讃嘆の声などは現われることが少い。こうなつたらなかなか一步前進することさえむずかしい。いくら聞いても名利と打算の種にしかない。

お寺さんでもお同行でも、真に聞き開いて、頭の大地についた人、心のトンネルの通じた人は、仏智を得らるるが故に尊く拝まれる。お念仏と人、人法一如の尊さである。

一。「仏法はあらめなるが悪し。」仏法の信の世界はいとこまやかなものである。普通の世界では許されることが仏法の世界では許されぬ。初めは棒ほどのことも針ほど6にさえ見えぬ。後には兎の毛ほどのことが大山ほどに見える。兎の毛羊の毛ほどの自力の心が大山の如くに見えて来て、亡ぼしつくされてないならば、今は小さいようでも、後には山ほどに広がつて来て、命とりになる。

一。だれも彼もはじめは華々しく仏法の舞台に登場して来るようである。それが、段々輝かなくなつて、やがてどこかへ行つてしまふ。小さき癌が身一ぱい拡がつて。

善従は九十歳まで生きられた。そして七十八と年老いてゆくままに輝かれた。毎日善従のことを思うことである。それにつけて、今、念仏者として出発したこの人が、四十まで生きても、本願の親木から落ちないであろうか。五十まで生きても、六十、七十、八十、九十と生きても、更に、百、二百、三百年と生かしても、親木から虫熟れとなつて落ちないであろうか。考えさせられることではある。

法然上人の御弟子三百幾十人、その中の五六輩をおいてほかは、みな、虫熟れになつて落ちたのだ。そして、わが聖人のみは千万年生きのびられても、ついに親木から落ちない方なのだ。

じつと私の心を見つめて念仏する。恐るべし〜。ああ、きびしい念仏の世界だ。

智慧のみ光よ、真実明にてまします、み親よ。

大安慰にてましますよりは、我には鋭き光炎王仏にてまませ。

歓喜光にてましますよりは、我には鋭き智慧光にてまませ。

清浄楽にてましますよりは、超日月光にてまませ。

み親にてましますよりは、無上法王にてまませ。

安価なる歡喜に酔うて道を忘れんとす。

空華にどう多くの人にかかづろうて、ともすればみ光を忘れんとす。

願作仏心よ、熾盛なれ。

一。

「然れば大乘の聖人、小乗の聖人、善人悪人一切の凡夫、みなともに自力の智慧をもては大涅槃に至る事なければ、無碍光仏の御形は智慧の光にてまします故に、この如来の智願海にすゝめ入れたもうなり。一切諸仏の智慧なりと知るべし。」『唯信抄 文意』

「自力の智慧」とは差別の智である。大乘の聖人、小乗の聖人、善人悪人、一切の凡夫、それぞれの智慧である。差別の智慧では、差別に満ちた一切のものは救われぬのみ。如来平等の智慧、一切諸仏をまつとうざる平等の智慧、この智慧の光明によつてのみ、あらゆる差別のものが救われるのである。

であるから、上は弥勒から下は我ら凡夫に至るまで、すべて、自分の智慧、自力の智慧をひるがえして、平等のみ光に帰せねばならぬ。

凡夫の自力には本質的には無明があつて智慧はない。その智慧でない「自力の智慧」を強く出すものほど世を暗くする存在である。人を泣かす存在である。他力に帰したようでも、またしても久遠劫来の習気が出る。俺は出来る、わしはやりてだ、人が見れば浄土の香りは隠れて、悪い臭気が鼻につく。

人は尽十方無碍の光に照らされねばならぬ。絶対他力の世界がそこにある。煩惱の泥水が自力によつて力んで仏に近づくのではない。力みがなくなつた時、寂靜の光が、あるがままの泥水を照して、あるがままを浄化して下さる。円融の徳がそこにある。

人間の持つものはその長所さえ欠点である。はじめに人に好かれたのがその長所なら、後に人に嫌われるのもまたその長所である。ましてその短所をや、欠点をや。であるから、衆生の持つ一切は智慧のみ光の前に全否定されねばならない。智慧のみ光のみ一切があるがままの相において生かして下さる。私のどこかに、この智慧のみ光を拒んで、念仏より先に自力がぬけだして仕事をしてはいないか。本気で靜かに、忠実に、大法を聞くべきである。

全一な靜かな徳の光は見えないで、単なる物知りに見え、お念仏の声の聞ゆるありがたい人には拝まれないで、こざかしい敏腕家に見える人、大法の園に入つて、もう一度、大地に沈黙してひれ伏して、如来浄土の梵声の前に一切を投げ出して、寂靜の光に照らされねばならないであろう。